

大乘

DAIJO 法話

この世に生まれて



兵庫・善教寺副住職

赤井 智顕

「いのち」はどこから来て、どこへ向かっていくのでしょうか。大切な問題なのに、どこかぼんやりしている、そんなことはないでしょうか。けれど「いのち」の行方のわからない人生は、どこか不安や空しさのつきまとう人生です。

何のために生まれ、何のために「いのち」を終えていくのか、私の人生そのものの問いを見つめていくことは、とても大切なことです。なぜならこの問いの解決なくして、人生に本当の安心をいただくことはできないからです。しか

し、こうした究極的な問い、宗教的な問いは、人間の知識や経験では解決することはできません。まさに自分の力では解決することのできない、大きな不安を抱えながら生きているのが、私たちの現実なのかもしれません。

思えば私たちは何も知らされず、何もわからずにこの命を恵まれ、誕生してきました。そして必ず命を終えていかなければならないのです。もしかすると、人は言うかもしれません。「人間死んだら終わりじゃないか」と。しかし、「死

んだら終わり」というのは、元気な時や順風満帆な時に言える言葉ではないでしょうか。果たして自分が死んでいく時、大切な人と別れていく時に、冷静沈着に「これで終わり」と言い切っていくことができるでしょうか。もしどんな状況でも「死んだら終わり」とキツパリ言える方は、とても強い方です。私には言えません。死ぬことに不安を感じますし、また会いたいと思う人がたくさんいるからです。

この世の中で、死というものを経験された方はおられるでしょうか。おそらくおられないと思います。経験していないからこそ、今ここに存在しているからです。つまり私たちは、どんなたかの死を見たことはありませんが、自らの死を経験したことはありません。何も知らないので

す。でしたら自分で自分の人生を、知ったような態度で勝手に終わらしていく必要もないように思うのです。むしろ「いのち」は、ただ空しく終わっていくものではなく、生まれてきた意味があり、間違いのない行き先があると、確かなお方に聞かせていただく中にこそ、私たちの人生は支えられていくのではないのでしょうか。

以前お聞きした、あるご夫婦のお話です。奥さんが里帰り出産をされ、無事に新たな命が誕生すると、一報を聞かれたご近所の方が次々とお祝いにかけてくださったそうです。奥さんのご実家には、九十歳を超えるおばあさんが同居されていました。近頃はお体の調子がおもわしくなく、あまり人前に姿を現されることがなかったとのこと。しかし、この時ばかり

りは近所の方の声や、生まれたばかりの赤ちゃんのにぎやかな声にひかれて、お祝いの席に姿を現されたそうです。おばあさんが生まれたばかりの赤ちゃんに近づいておっしゃいました。

「お前さんは一体どこからやってきたんだい？」

その声を聞かれた奥さんが答えられます。

「おばあちゃん、この子はね、このたび不思議にも人間の世界に生まれてきてくれたのよ」

この言葉を聞かれたご近所のお同行の方が、赤ちゃんに向かっておっしゃったそうです。

「ようこそ、人間の世界に生まれてきなされた。この世界は苦しいこと悲しいことがたくさんあるところ。でもね、ここは仏法を聞くことができる場所。『南無阿弥陀仏』の仏さまと出会う



カット 長井多美栄

ことができる場所ですよ。苦悩の人生を支えてくださる尊い教えがあります。どうぞお念仏の道をお浄土への人生を歩んでくださいませ」
このような会話が、今なお続けられていることに、感動と驚きをもって聞かせていただいたことでした。

私は何のために生まれ、何のために「いのち」を終えていくのでしょうか。

お釈迦さまは、「いのち」の行方を知らず、苦悩の人生を生きる私たちのために、阿弥陀さまのご本願のお心を説いてくださいました。阿弥陀さまの願いを説くことこそ、お釈迦さまがこの世にお出ましになられた、本当の目的だったからです。

私には願いがかけられています。阿弥陀さま

という仏さまの願いです。お釈迦さまの説かれた、阿弥陀さまの願いを聞かせていただくことこそ、私がこの世に生まれてきた本当の目的だったのです。

阿弥陀さまは、大きな不安を抱えた私の「いのち」を、「仏法をよるこぶ者に育て、仏のみ名を称える者に育て上げて、必ず浄土へ生まれさせる」と願ってくださいました。そしてその願いは「南無(まかせよ)阿弥陀仏(われに)」のほたらきとなって、いまここに届けられています。「南無阿弥陀仏」の仏さまと出会うことによって、苦悩のいまが支えられ、空しく終わっていくことのない人生が恵まれます。そしてそこにはじめて、浄土という確かな「いのち」の行き先を知ることができるのです。